

初期救命救急講習による薬学生の救命意識の向上

○中村 武夫<sup>1</sup>, 伊藤 栄次<sup>1</sup>, 三宅 義雅<sup>1</sup>, 桑島 博<sup>1</sup>(<sup>1</sup>近畿大薬)

【目的】新しい薬学教育の特徴の一つは、知識偏重教育から脱却して、技能・態度を含む統合型教育、能動参加型学習の実施である。薬学教育モデル・コアカリキュラムにおけるヒューマンズ教育の一般目標は「生命に関わる職業人となることを自覚し、それにふさわしい行動・態度をとることができるようになるために、人との共感的態度を身につけ、信頼関係を醸成し、さらに生涯にわたってそれらを向上させる習慣を身につける」とされている。この目標に到達するための手段の一つとして、早期体験学習において初期救命救急講習を実施し、薬学生の人命救助に対する意識の変化について検討した。

【方法】薬学部1年生を対象に救急現場遭遇体験、応急手当講習の受講歴、また「あなたにとって大切な人の場合」、「他人の場合」の救助に対する意識について、無記名の自記式アンケートを行った。

【結果・考察】大学入学前までの救急現場遭遇体験者は約20%弱であった。また、自動車教習所等で応急手当講習を受講した者は約60%であった。初期救命救急講習の実施前後における意識の変化については、「たとえ一人であっても応急手当をする」と回答した者の割合が、「あなたにとって大切な人の場合」では約40%から70%弱に、一方、「他人の場合」では7%から35%にそれぞれ向上した。また大切な人、他人に関わらず「たとえ一人であっても応急手当をする」との回答は7%から30%強に増大した。ダミー人形やAED訓練機を使用しての参加型学習である初期救命救急講習は、「生命に関わる医療人養成」というヒューマンズ教育の目標達成のためにも、有益な意識付け教育の一つとなり得ることが明らかとなった。